

# 《蓮 宗 宝 鑑》管 窺

——契嵩とのかかわりをめぐって——

## 一

近時、筆者は宋の禅僧明教大師契嵩の言行が元の廬山白蓮宗主である優愚大師普度の言行のうえに並大抵でない影響を及ぼしているという意外な事実を知りえた。意外な事実といったのは、従来わが国の浄土教家普度に関する研究においては、契嵩とのかかわりについて全く顧慮されてはいないからである。そこでとりあえず別稿にてその一端を報告しておいた。<sup>①</sup>この小論はそれを承けるものとなる。そこで前稿のあらましを簡潔にのべ、今回の主題とのかかわりをのべることにする。

## 二

安 藤 智 信

前稿では普度が至大三年（一二三〇）正月に武宗皇帝に奏した上白蓮宗書をめぐって契嵩との間には二百五十年の隔りがありながらも、歴然たるつながりをみせるのである。両者をとり巻く環境と主体的行動の両面で極めて相似するのである。

そもそも北宋における儒学は中世のながい睡から醒め、活気溢れる様相を呈してきた。その際、宋儒は仏教排撃をバネとして儒教復興を行おうとした。その中核的存在が歐陽修である。彼の本論（三篇）はその排仏論を披瀝したものととしてよく知られている。そこでの主張の大綱は、かつ

ての韓愈のごとき一見過激な廃仏策を提言するような言辭はとらず、儒教が完全に復活することこそが、仏教を駆逐することにやがてつながるとするのである。<sup>③</sup>即ち欧氏は排仏論をテコとしながら儒教の再生をなしとげようとするのがねらいであった。それだけに欧氏の排仏説はきわめて説得力を持ち、士大夫読書人層へ浸透してゆき、やがて政府の仏教政策の上に反映されるに至る趨勢にあった。そこで契嵩は宋儒のこのような排仏論を深刻な事態とうけとめ、輔教編・非韓などをあらわして仏教側からの弁明に立ち上るに至る。契嵩にはまたこれと並行する重要な仕事があった。かれが所属する禅宗の伝灯史と教学体系の確立に努めたことである。<sup>④</sup>とりわけ伝法正宗記・伝法正宗論・伝法正宗定祖図の三書を著わして釈尊から達摩に至る西天の二八祖伝灯相承説を主張することが、二四祖説に立脚する天台の子昉の論難を招き、長期に亘る抗争となる。<sup>⑤</sup>そこで嘉祐六年（一〇六一）に契嵩は輔教編と禅書三部を携えて杭州から開封へのぼり、首相の韓琦・副首相の欧陽修らに、大藏經への入蔵を強力に働きかけ、ついに仁宗皇帝に二度にわたる上書（万言書上仁宗皇帝と再書上仁宗皇帝）を呈するに至った。このような直訴という行動を契嵩が選択する意味は何か。入蔵を果すことにおいて、一つには天子及

び欧氏を含む諸大臣たちに仏教への正しい認識と理解による公正な仏教政策の保証を獲んがためであるし、もう一つには膠着化する伝灯問題に一の結着を得んがためであった。しかるに翌嘉祐七年に契嵩の四書の入蔵がみとめられている。

契嵩の一件よりほぼ二百年後に、普度は上白蓮宗書を著わしたが、契嵩の仁宗帝への二つの上書を下敷として書いてある。普度のこの上書の最大のねらいは、元朝政府から強烈な弾圧をうけ一切の白蓮宗の宗教活動が全面禁止されている状況の打開にある（ここで契嵩をとり巻く宋儒の排仏の昂揚と、それを承けた仏教統制という教団の危機が想起される）。次に白蓮宗の名をかたり、世間をまどわし、国法をも犯す偽似白蓮宗徒を叱り、廬山白蓮宗だけが素姓ただしき浄土仏教であると訴える（契嵩における西天二八祖説をめぐる仏教内の正統争いが想起されよう）。そして翌年廬山白蓮宗にかぎり宗教活動がゆるされ、蓮宗宝鑑の印行がみとめられたのである。

このように両者の行動の要因と展開をながめるとき、多くの類似が判然とし、普度の白蓮宗復興の宣言文であるところの上白蓮宗書に、契嵩の二つの上書が全面的にとり込まれることになった歴史的意義がうきばりとなったのである。

る。そこでこの事実を承けて、上白蓮宗書より五年前に既に書き上げている蓮宗宝鑑における契嵩のとり扱いぶりにまで廻って見ておこうというのがここでの主題となる。

## 三

前稿の末で言及だけにとどめたことがらであるが、このような契嵩の普度への影響について、ほぼ普度と同時代を生きた月江正印という禅僧が適確な指摘をなしていることを紹介しておきたい。その史料となるのが『廬山復教集』<sup>⑤</sup>巻下、朝賢宿衲讚頌の一つとして見える松江天寿寺住持の肩書をもつ月江正印の讃辭である。

昔・嘉祐年間、歐陽修が政府にいた頃、仏老の教を排斥する急先鋒であった。その頃、明教禪師は永安（蘭若）に居て著述につとめ、輔教書（編）成り、京へのぼり奏上におよんだ。文中、道のためにして名のためならず、法のためにして身のためならずという一語には大臣たちはみな歎服した。欧公は嵩の主張の検討をはじめや、膝をうって、僧中にもこんな人物がいるのかとおどろいたという。その書は大蔵に入れられたのである。

優曇大法師は遠公念仏の教を弘めつつも、異端がそ

れをけがしていることをなげいた。そこで明教（契嵩）のこころにたち、蓮宗宝鑑という一書をあらわし、十門からなる修行の捷徑をあきらかにし、天子にこれを献上した。京に留り、六たび暑寒をへて刊行のゆるしをうけた。国師や大臣がそろって賞讃をおしまなかった。もしもかれの願力が宏深で道眼がすみきっていなかったならば、王臣を感動させるといふような希世の機会をものにできるはずがあつたらうか。また白蓮教が雁門法師（慧遠）に創始されてより数百年にして、慈照宗主（茅子元）のとき復興した。その祖脉は間一髪のところであつたのだ。

昔嘉祐間、歐陽公在翰苑、以排斥仏老為己任。時明教禪師居永安、著書、輔教書成、趨京奏上。中有為道不為名、為法不為身之語、在朝諸賢莫不歎服。及欧公見師之議論、乃拊髀曰、僧中有此郎耶。其書竟得入藏。優曇大法師、弘遠公念仏之教、恥為異說所混。迺本明教之志、述蓮宗宝鑑一書、列為十門、以曉修行之捷徑、獻之聖天子。留京六閱暑寒、蒙旨刊行。国師大臣、同加賞識。若非願力宏深、道眼明白、曷能動惑王臣希世之遇。又以蓮教創始於雁門法師數百年後、眷興於慈照宗主。慮其祖脉、僅如一髮。

ここに正印禪師は普度が蓮宗宝鑑の述作とそれを携えての白蓮宗復権の運動を成功へ導いた心底には明教契嵩の護法運動が、排仏論者歐陽修はじめ諸大臣をも動した故事を踏まえたものであることを適確に述べているのである。ちなみに『廬山復教集』巻下の朝賢宿衲讀頌には月江の外、実に十指に余る僧俗が蓮宗宝鑑の公刊と廬山白蓮宗の活動再開を讃歎する詩文を盛っているが、契嵩と普度の強い絆についての指摘は、正印を除いて見当らない。⑥その意味で正印の卓見は貴重とせねばならないわけである。

なお正印の文中、契嵩についての記述の典拠となったのは、北宋末の洪覺範の記述であることは間違いないと思われるので併せてみておくこととする。

書⑦ができる、携えて京師へゆき、内翰の王素を介して仁宗皇帝に献じた。その前に書をさしあげておいた。天子は、固⑧に道の為にして名の為ならず、法の為にして身の為ならずとあるところまで読みすみ、その誠がすっかり気に入り、明教大師をおくり、その書⑩の入蔵をゆるした。それよりさき書⑪が中書へ廻ってきたとき、韓琦（魏国はその封号）がこれを見て欧陽修（文忠はその諡）にまわした。欧公は文章を書かせたら右に出るものなきを自任し、儒教に肩入れして仏教

を好まなかったが、その文を見て、琦にむかって「僧の中にもこのような人物があるうとは思わなかった。明朝にもちよつと会ってみたいものだ」といった。韓公がともなうて行って欧公にひき会わせた。日暮まで語らいははずみ、欧公は大に満足した。かくて明教の名は世間にひろまった。

書成、攜之京師、因内翰王公素、献之仁宗皇帝、又為書先焉。上読至以固為道不為名、為法不為身、歎愛其誠。旌以明教大師、賜其書入蔵。書既送中書、時魏国韓公琦覽之、以示欧陽文忠公。公方以文章自任、以師表天下、又以護宗・不喜吾道、見其文、謂魏公曰、不意僧中有此郎邪、黎明当一識之、公同往見文忠。与語終日、遂大喜。由是公名振海内（石門文字禪卷二十三、嘉祐序）。

両者が終日語り合った内容について、これだけでは明かでないが、契嵩が欧陽修に送った書簡によって知られる。わたしごと山林幽鄙の人間が、無礼にも、今その書面を天子にさしあげて、願をおきき容れたいかどうかとしております。それなのに閣下は却下されないばかりか、わたくしを温かく迎えて歓談してくださいました。そのおりわたくしめの読書とか著述について問い

かけられたのです。これは君子だけが、善を為すものに味方し励ましその成就を願ってくださるからにちがいありません。わたくしめは世外を放浪し、愚になり切ることをなりわいとしております。文章経術もて治乱を弁じたり、人物論というようなことは、始から得意といたしません。せっかく閣下の門を踏み、閣下がありがたい言葉をかけてくださいましたのに、どこをついてもお恥かしいものばかりでして、どうして閣下の期待に副いえましょう。しかしわたくしめは山林からまいりましたので、山林のお話を秘書の方へ届けておきます。閣下の大政の合間にでも、おもいを清閑の域になごませてください。又わたくしめは、山林の無事なるにおいて、かの性命の思想を修め、その性命の書も、ものすることができました。わたくしめの山林の話が新撰武林山志ともうす一卷、その性命の書に輔教編ともうす印刷ずみの一部三冊がございますので捧呈いたします。

若某者山林幽鄙之人、無状、今以其書、奏之天子、因而得幸下風。閣下不即斥去、引之与語温然。乃以其読書爲文而見問。此特大君子与人爲善、誘之、欲其至之耳。其放浪世外、務以愚自全。所謂文章経術、弁治

乱、評人物、固非所能也。適乃得踐閣下之門、辱閣下雅問、願平生慚愧、何以副閣下之見待耶。然其自山林来、輒欲以山林之説投下執事者。願資閣下大政之余、游思於清閑之域。又其山林無事、得治夫性命之説、復並以其性命之書。進其山林之説有曰新撰武林山志一卷、其性命之書有曰輔教編印者一部三冊(譚津文集卷九上 歐陽侍郎書)。

これによつて契嵩と歐陽修との間での話題が何であつたかがよくわかる。思うに、嘉祐六年の八月頃に輔教編等の入蔵運動展開のため、契嵩自ら杭州より都の開封へのぼり、まず万言書上仁宗皇帝を帝に進上し、同年十二月六日に、再書上仁宗皇帝を添えて輔教編等の入蔵を願ひ出ている。この欧氏宛書簡から推しはかるに、十二月六日以前に両者が会つてゐることがはつきりする。契嵩にとつて実りある会見だったにちがいない。輔教編の処々に明かに欧陽修を論敵として意識した叙述があるが、その書の披見を堂々と勧めてゐることが、この会見の成功をよく物語つてゐるといえよう。またこの事実ひとつをとつても、この入蔵運動に賭けた契嵩の不退の決意が十分うかがえる。

ところで月江正印にはこの他にも契嵩についての一文がある。

明教禪師を茶毘するに不壞なるもの五あり。頂・耳・舌・童真と数珠という。かねてより悲願を体し、弘法拯難するにあらざれば、かくなるはずがない。あの皇祐、至和のころ、群儒鋒起して懸命に吾が道をはばまんとし禪師をかるんず。「その書を火き、その居を廬にし、その人を人にせん」という議論はむかしからある。(禪師の)豊功碩徳は、わが仏の九十六種外道を改心させ、わが祖が六宗の邪見を破ったのと遜色がない。今その人の書「周感之の京に入るを送る詩の序」<sup>⑭</sup>を観る。数百年も経っているのに、老舌は生生とありし日をしのばせ、筆蹟の厳正はその人柄をしめす。藏藏主はこの書を六花峯の烈焰の中から得たのだ。まことに輪王髻中の宝<sup>⑮</sup>を得る以上のものだ。おもうに、たといこれを焼こうとも、きたえあげた黄金のごとく、烈焰のみたかくたちのぼり、五の不壞とともにのこりつゞけよう。

明教禪師闡維、不壞者五。曰頂、曰耳、曰舌、曰童真、曰数珠。非夙承悲願、弘法拯難、曷能爾耶。当其皇祐至和間、群儒鋒起、力拒吾道、徵禪師。火其書、廬其居、人其人者、久矣。豊功碩徳、与吾仏化九十六種外道、吾祖破六宗邪見、無以異。今觀親書・送周感

之入京詩序、雖経數百年、老舌熾然、如無恙時、而墨妙嚴正、如其人焉。藏藏主、得之於六花峯烈焰之際。不超如獲輪王髻中之瑤、愚謂縱使火之、当如百煉精金、光焰万丈、与五種不壞者同伝（月江正印禪師語録卷下、明教大師墨蹟）。

正印のこの一文に出てくる「送周感之入京詩序」は契嵩の文集に入れられているから、その内容を吾人も知りうるわけである。<sup>⑯</sup>この文章も正印の契嵩理解の深さを示す傍証として貴重である。そうでなければ、普度が蓮宗宝鑑を著わして、白蓮宗の復権活動を展開する不退転の決意の支えとして、たえず契嵩の故事を念頭においていたことを見抜くことはできなかったにちがいない。

#### 四

普度が蓮宗宝鑑を著わした動機は、国初以来の白蓮宗禁止令に対する打開をめざすところにある。本書十篇の内容は遠公にはじまり、茅子元を経て普度に至る浄土教を体系づけることにより廬山念仏の歴史的正統性を印象づけ、廬山蓮宗は所謂左道的白蓮教とは根柢的に異なることをうったえんとするにある。すなわち、卷十の念仏正論篇の二十五章は、逐章にわたって、白蓮宗の名をかたり、あるいは

仏教の名のもとに行われている迷信邪説を列挙して行うその論駁のはげしさの意味は重い。元朝の圧迫の強烈さを窺わせるものであるといえよう。これらの問題へのこれ以上の深入りは本稿ではゆるされない。

前の論稿で明らかとなった普度の上白蓮宗書と白蓮宗復教運動における、かれの契嵩への関心について、それより五年前に書上げられた蓮宗宝鑑においてはどのような態度で契嵩の残した文献を取り扱っているのは次の三箇所である。蓮宗宝鑑の該当文と契嵩側の相当する文との対照を行うと次の如くである。なおテキストは両者とも大正藏經に拠ることとする。

(1) (蓮宗宝鑑・卷三)

明教大師曰、能仁之垂教也、必以禪為宗、而仏為祖。祖者乃其教之大範、宗者乃其教之大統。大統不明、則天下不得一其所詣。大範不正、則天下不得質其所証。夫古今之学仏輩、競以其所学相勝者、蓋由宗不明祖不

(再書上仁宗皇帝<sup>17</sup>)

臣嘗謂、能仁氏之垂教、必以禪為其宗、而仏為其祖。祖者乃其教之大範、宗者乃其教之大統。大統不明、則天下学仏者、不得一其所詣。大範不正、則不得質其所証。夫古今三学輩、競以其所学相勝者、蓋由宗不明祖不正

正而為患、然非其祖宗素明不正也。後世学者、不能尽考經論而校正之。乃有束教者、不知仏之微旨妙在乎言外。諸禪者、不諒仏之所詮概見乎教内。紛然自相是非、古今何嘗稍息。

(T. 47, 317a)

(2) (蓮宗宝鑑卷三)

秦僧智嚴於蜀賓国、懇請跋陀羅偕來諸夏傳授禪法。初至長安、後至廬山、遂出禪經、与遠公同訳。訳成、遠公為之序。跋陀羅嘗謂遠公曰、西土伝法祖師、自大迦葉、直下相承、凡有二十七人。其二十六祖、近世滅度、名不如蜜多者。所以繼

而為其患矣。然非其祖宗素不明不正也。特後世為書者之誤伝耳。又後世学仏者、不能尽考經論而校正之。乃有束教者、不知仏之微旨妙在乎言外。語禪者、不諒仏之所詮概見乎教内。雖一円顚方服之属、而紛然自相是非。如此者、古今何嘗稍息。

(T. 52, 691b)

(伝法正宗定祖図)

秦僧智嚴於蜀賓国、乃懇請跋陀偕來諸夏傳授禪法。初至長安、其後乃之廬山、遂出其禪經、与遠公同訳。訳成、遠公為之序。嘗謂遠公曰、西土伝法祖師、自大迦葉、直下相承、凡有二十七人、其二十六祖、近世滅度、名不如蜜多者、所出其

世弟子曰般若多羅、方在南天竺國行化。以此慧灯、次第相伝、達磨多羅、後為二十八祖。我今如其所聞而說是義。遠公聞跋陀羅言、故序云、達磨多羅、西域之雋、禪訓之宗。宝林所謂跋陀羅嘗与遠公言其伝法諸祖世数、固驗於禪經矣。

(T. 47, 317b)

繼世弟子曰不若多羅者、方在南天竺國、行其教化。故其禪經曰、「仏滅度後、尊者大迦葉尊者阿難云云乃至不如蜜多羅、諸持法人、以此慧灯、次第相伝、我今如其所明、而說是義」所聞者、即達磨多羅也。後為二十八祖。故遠公序曰、「達磨多羅、西域之後、禪訓之宗」。宝林伝所謂、跋陀嘗与遠公言其伝法諸祖世数、固驗於禪經矣。 (T. 51, 772bc)

(3) (蓮宗宝鑑卷四、明教大師題遠祖師影堂記)

遠公事蹟、學者雖見而鮮能尽之。使世不昭昭見先賢之德、亦後学之過也。予読高僧伝・蓮社録(記)及九江新旧録。最愛遠公(十凡)六事、謂可以勸(十也)。乃引而积之。列之其影堂、以示來者。陸修靜異教学者而送過虎溪。是不以人而棄言也。陶淵明耽酒而与之交者(ナシ)。蓋簡小節而取其達也。跋陀高僧以顛異被擯而延且譽之。蓋重有識

而矯嫉賢也。謝靈運以心難不取而果歿於刑。蓋識其器而慎其終也。盧循欲叛而執手求旧。蓋自信道也。桓玄震(振)威而抗對不屈。蓋有大節也。大凡古今人情莫不畏威而苟免、忘義而避疑、好名而味実、党勢而忍孤、飾行而畏累、自是非人。孰有道尊一代為賢者師、肯以片言而從(十其)人乎。孰有宿(夙)稟勝德為行耿潔、肯交醉鄉而高其達乎。孰有屈人師之尊礼斥逐之客而伸其賢乎。孰有拒盛名之士不与於教而克全終乎。孰有義不避禍敦睦故舊而信道乎。孰有臨將帥之威在殺罰暴虐之際、守道不撓而存其(全)節乎。此故遠公識量広(遠)大、独出於古今(十矣)。若夫荷負(其扶荷)至教、広大聖道、垂裕於天人(十者)、非蒙乃能尽之。其聖歟賢耶(邪)。偉乎、大塊噫氣、六合風清、遠公之名聞也。四海秋色、神山中聳、遠公之清高也。人龍僧(僧龍)鳳、長(高)揖巢許、遠公之風軌也。白雲丹壑(嶂)、玉樹瑤草、遠公之棲処也。蒙後公而生、雖慕且恨也。瞻其遺像、稽首作礼、願以弊文、書(題)于屋壁。

(T. 47, 321ab)

〈(3)はほぼ「題遠公影堂壁」(鐔津文集卷十三 T. 52, 719ab)の全文を普度が転載したもので、多少の文字の異同について( )印で校訂するにとどめた。〉

(1)(2)は宝鑑卷三の冒頭、第一章の念仏正宗説にみえる。



(1)再書上仁宗皇帝は、契嵩が嘉祐六年十二月に伝法正宗記、伝法正宗論、伝法正宗定祖図と輔教編の入藏を願ひ出たときに添えられた天子への上奏文である。引用の部分の嵩の論旨は、禅宗であれ教宗であれ、祖・宗をそれぞれ立てて張合い、後世になるほど誤伝が重なり、その祖・宗が紛然たるをなげき、帰一しようという主張である。また(2)伝法正宗定祖図は契嵩が、外の二禅書を要約した体裁のものである。西天の祖・宗を明らかにし、西天二八祖説を展開している。宝鑑の引用は、契嵩が、仏陀跋陀羅伝と達摩多羅禅経(T. 15, 301c)を挙げて、二六祖が不如蜜多で、二七祖が不若多羅であることの論証につとめている部分である。

一方念仏正宗説はどういう文脈の上から契嵩の二文を扱っているか。(1)はこの章の冠頭におかれる。普度が注目するのは「能仁氏の垂教は、必ず禅を以てその宗となす」というところにある。というのは(1)の引用にすぐつづけて、

わたしがかねて大蔵の経とか伝を検討したところ、

そのいわゆる禅宗こそは仏祖の心だ。仏一代の説法はかならず心をもって宗としている。それなのに衆生の根器はみな異なるのだから、一法でもって十分といえようか。我が仏はみなに化を設けられ、それぞれの病に応じた薬を与えられることとなった。されば浄土念

仏宗の法に、権実・頓漸がもうけられた。いずれも如來のさとられた実理をあかし、衆生にそなわる本源をひらこうとされる。念仏三昧で一切の人をおさめて明心見性させて仏慧に入らしめんとされる。

予嘗探大蔵或経或伝校驗、其所謂禅宗者仏祖之心也。仏説一大蔵教、未嘗不以心為宗也。嗟乎衆生之根器異也。又安得以一法而明之。我仏平等設化、於是对其病而投其藥耳。且夫浄土一宗念仏之法、有実有権有頓漸。皆以頭如來所証之実理、廓衆生自性之本源。以念

仏三昧撰一切人、明心見性入於仏慧とある。普度は禅を欠く仏教はないとし、浄土念仏宗の場合には念仏三昧に当たるといっているのである。

つづいて普度は遠公こそ東土念仏三昧の初祖とし、念仏三昧詩集序(広弘明集30)や百二十三人の同志にその根拠をもとめんとする。更に有力な証拠として遠公が禅法に強い関心をいだき、それで(2)を引用し、禅の巨匠覺賢との連繫を示そうとするのである。これによってこの章の意図は遠公が仏祖伝灯の三昧をうけつぐ東土の祖であることに主眼がおかれていることがわかる。従って(1)(2)は慧遠がらみで用いられていることが銘記されるのである。宝鑑の引用は、(1)では「特後世為書者之誤伝耳」や「雖一円頓方服之属」

を、(2)では「故其禪經曰……諸持法人」を脱落させるといふ乱暴を犯すが、今のべたごとき普度の目論見からすれば氣にならないのであろう。

次に(3)題遠公影堂壁は宝鑑卷四念仏正派篇の第四章に全文収載している。(1)(2)にくらべたら章句の脱落はみられず、文字の異同はテキスト系統の相違によるとみてよく、それだけに普度の氣の入れかたがうかがえよう。ちなみに卷四の構成は全体二三章からなり、第一章 念仏正派説、第二章 遠祖師事実、第三章 遠祖師歴朝諡号、第五章 廬山十八大賢名氏、第六章 貫休禪師題十八賢影堂詩、第七章 弁遠祖成道事、第八章 壁谷釈曇鸞大師云々となる。

しかも第七章弁遠祖成道事をみれば普度がうけた感銘のほど、歴然たるものがある。

礼記<sup>⑩</sup>にいう、立派な先祖でもないのにそれをほめるのはうそつき、善があるのに知らぬのは不明、知っていて記録にとどめぬのは不仁なり、この三つは君子の恥じる所だと。ああ、吾が学仏の徒としてまことにはずかしい。吾が祖遠公の行位はあきらか、功德は広大だ。愚<sup>おろし</sup>はその教にかかわらせていたゞき末流の裔でありながらも、不肖孤陋、学浅く才もなくて、いまだに先宗を紹襲しえないでいる。実乃有孤慈蔭(？)。明教

の記を読んで、大にはじいたことであつた。

礼記曰、先祖無美而称之者是誣也。有善而不知者是不明也。知而不伝者是不仁也。此三者君子之所恥也。

噫在吾学仏之徒、豈不然也。吾祖遠公行位昭昭、功德广大、愚忝与其教為末流之裔。不肖孤陋、学浅才疎、未能紹襲先宗。実乃有孤慈蔭。嘗読明教記。不亦甚慚乎。

ここにいう明教の記とはまさにこの契嵩の題記を指すことはいふまでもない。なおこの記載のあとに廬山成道記という書に対するこっぴどい弁駁がみえている。普度がこの書の内容で看過できないとして指摘するくだりを示すと次の如くである。

遠公は太行山の道安法師を敬い出家しているのに、梅檀を師とし尊ぶと曲げて伝えるのが、第一のいつわり。道安を遠公の孫弟子とするのは、いつわりその二。遠公は三十年、すがた山より出ず俗に足をふみ入れてもないのに、白莊が捕虜にしたというでっちあげが、いつわりその三。晋帝が三たび遠公を招くも、疾と称して赴かなかつたのに、崔相公に身売して奴隸となつたというでっちあげが、いつわりその四。道安の腕に肉の輪があつたが、遠公にすりかえているのが、いつ

わりその五。臨終の遺命により死骸は松下にさらしたのち、そっくり西嶺に葬り凝寂塔<sup>③</sup>という動かぬ証拠まで現存するのに、遠公はきれいな船に乗り兜摩天に昇ったというでっちあげが、いつわり六。道生法師が、虎丘で講経のとき石に向って誓をたてると石がうなずいた話を遠公にすりかえているのが、七番目のいつわりだ。

遠公礼太行山道安法師出家妄伝梅檀尊者一誑也。妄以道安為遠公孫者二誑也。遠公三十年影不出山足不入俗妄謂白莊劫擄者三誑也。晉帝三召遠公称疾不赴妄謂壳身与崔相公為奴者四誑也。道安臂有肉釧妄謂遠公者五誑也。臨終遺命露骸松下全身葬西嶺見在凝寂塔可証妄謂遠公乘彩船升兜率者六誑也。道生法師虎丘講経指石為誓石乃點頭妄謂遠公七誑也。

ここで普度の槍玉に挙がる廬山成道記の一誑から五誑までの話柄は、A・スタインが敦煌からもちかえた廬山遠公話という標題をもつ写本の筋書と全く一致している。この写本のあとがきに、開宝五年張長継書記とあるところから推すと宋代にこのテキストがゆきわたっていたことを物語り、三百二十年余経った元の普度の頃も大に流行していたというのは興味つきぬものがある。なおスタインの写本は

完結していないことが惜まれるが、普度の六誑、七誑にみえる話柄が、張長継の手本としたテキストには書かれていたのではなからうか。

普度から見れば何故かこのような慧遠像は許し難いとし、それにひきかえ契嵩の拙く慧遠像を絶賛するのであった。このように蓮宗宝鑑における契嵩の存在感をあからさまにされるとき、五年の後にかかれた上白蓮宗書にみたところのめりこみとすらみえる契嵩への普度の対応に、厳然とした必然性のあることを知りえたのである。

#### 註

① 拙稿 元の普度撰「上白蓮宗書」の歴史的意義(仏教史学会創立30周年記念仏教史学論文集―仮称―)。

② 欧氏と同期に出た排仏論者李輶も富国策において、韓愈の席仏説を暴論だとしている。竺沙雅章「宋代壳牒考」(仏教史学研究22―1)一八頁参照。

③ その歴史的意味について、柳田聖山著 初期禅宗史書の研究四二五頁外、随処にくわしく論じられている。

④ 安藤俊雄著 天台思想史八頁。

⑤ 復教集は小笠原宣秀著 中国近世浄土教史の研究に所収。ただ、蓮宗宝鑑序の中で、仏鑑希陵(一二四七―一三三二)が、「明教上仁宗正宗論、息闢仏之議、於当時優曇獻皇上宝鑑編、復白蓮之教」(T.47.303b)と云っているのをあげうるのみである。

- ⑦ この書とは、洪寛範の引文の直前の部分では伝法正宗記、伝法正宗論及び伝法正宗定祖図となっている。
- ⑧ ここでの書とは、万言書上仁宗皇帝を指す。
- ⑨ この有名な為道不為名、為法不為身の句は、鐔津文集 卷八所収の万言書上仁宗皇帝の中で、誠欲幸陛下察其謀道不謀身、為法不為名(T. 52, 687a)、と然平生為法不為己(同690c)というのが原型となっている。
- ⑩ 註⑦参照。
- ⑪ 註⑧参照。
- ⑫ 拙稿仏日明教契嵩伝私考(大谷大学研究年報29 一一七頁)法難と入藏運動の項)において、細かい考証を試みてある。
- ⑬ 韓愈の原道に、「人其人、火其書、廬其居」とあるを指すことはいうまでもない。
- ⑭ 鐔津文集卷十一に収める。
- ⑮ 法華経七喻の一。安樂行品に出ず。
- ⑯ 前掲拙稿「仏日明教契嵩伝私考」において、周感之と契嵩との交渉について述べておいた。
- ⑰ 鐔津文集卷九。
- ⑱ 南宋、宗曉「楽邦遺稿」上(T. 47, 244c~25a)、志磐「仏祖統紀」26(T. 49, 271ab)にもそれぞれ全文を収める。なお拙稿「仏日明教契嵩伝私考」に一応の解説を施してあるので参照を乞う。
- ⑲ 礼記の祭統。
- ⑳ 凝寂塔については、仏祖統紀43に「太宗太平興国三年四月詔諡廬山遠法師曰円悟、塔曰凝寂」(T. 49, 397b)とある。
- ㉑ 王重民ほか編『敦煌変文集』上巻に収載。入矢義高先生はこれを底本としながらも、更に再校訂のうえで邦訳されたのが、「廬山遠公の話」(中国古典文学大系60の仏教文学集)である。
- ㉒ 廬山遠公話と廬山成道記とのかかわりについては、牧田諦亮稿「慧遠著作の流伝について」(慧遠研究—研究篇—四八二~三八頁)にも言及されている。

(本学助教授 東洋仏教史学)